



テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」
コメンテーター

玉川 徹 さん

朝食時にテレビをご覧になるだろうか。玉川徹さんは、テレビ朝日の社員だが、「羽鳥慎一モーニングショー」のレギュラーコメンテーターとして、同番組に連日出演している。こちらはもぐもぐと口を動かしながら見ているだけだが（録画している弁護士もいるとか）、コメンテーターは大変だ。何でも知っていると思われ、一家言を求められる。そんな立ち位置を楽しげにこなしている玉川さん。MC 羽鳥さん、プロデューサーさんたちとのチームワークも軽やかに、朝のひとときをつくり続ける。

聞き手・構成：味岡 康子、小峯 健介
写真撮影：坂 仁根

— 玉川さんがレギュラーコメンテーターとして出演している『羽鳥慎一モーニングショー』は、午前8時台では、視聴率が民放でトップです*1。セールスポイントはどこですか。

自由だということですね。僕はテレビ朝日の社員なので、他局のことはわかりませんが、うちの番組に出演しているコメンテーターの方は他局に出ている方もいらっしゃる。お聞きすると、うちはすごく自由だと。例えば内容もそうですし、時間に関してもたっぷりしゃべれると。一方他局は、まず時間が短いんですね。話す内容についても、こういうふうにししゃべってくださいと言われるらしい。

— それは事前の打ち合わせ通りにということですか。

僕は制作側でもあり、作る側としては、例えばこのコメンテーターの方にはある種批判的なことを言ってもらいたいという期待はあるわけですが、ただそれは、うちの場合には言わないです。自由なんです。時間についても、例えば他局の場合だと、VTRが5分、10分あるとスタジオが2分ぐらいが通例だと思うんですね。うちの場合にはたぶん逆です。VTRが2分ぐらいだと、

スタジオに5～6分取ったりもします。だからスタジオショーなんですね。まさにスタジオでどういうふうな話を展開できるかというところが、一番の特徴に今はなっていて、そこがほかのワイドショーと全然違うところかなと。

— 玉川さんは、かつて『週刊文春』で好きなコメンテーターの7位にもなり、また一社員なのに、今や芸人さんに物まねまでされる人気ですが、他方ネットでは上から目線だとかイタそうだとバッシングもされています。

最初に僕が企図したことがあって、映画でもいい人だけの映画ってつまらない。悪役がいる映画はストーリーも起伏に富んで面白い。僕のパートナー、MCは羽鳥さんですが、この羽鳥さんが本当にいい人なので、例えば毒を出してほしいと思っても出てこないです。だったら、僕がその役割をやりますと羽鳥さんと話しました。僕の悪役ぶりがある種痛快な部分があるんじゃないですか。でも、僕は特別に露悪的にやっているつもりはなく、自分の中にいろいろなアンビバレントなものがあるわけですね。一つの事象に関しても、Aというふうにも考えるし、Bとも考えるといったときに、

*1：2019年5月13日インタビュー当時

例えば世の中一般では、皆がAと言うとする、じゃあ僕はBをしゃべろうと。このBは、自分の考えと違うことを言うのではないんです。やはり自分の中にもあるんです。それをBである種強調してしゃべる。また、僕以外のコメンテーターの方がAとしゃべったら、僕は、じゃあ、Bの部分でしゃべろうというようにして対立の構図にしてみたり、そこに多様な意見が出てくるわけですね。それがきっと面白いんじゃないかなと思うんですね。

—ほかのワイドショー*2のコメンテーターに比べてかなり鋭い指摘をされていますが、毎日の出演で準備は大変ですか。

蓄積がありますからね。今日のテーマはここが新しい、今日のテーマのポイントはここだということがあれば、そのポイントに沿って朝に調べ物をしたり、そういうことは毎日やっています。

—毎日の特集が30分から40分ぐらいですか。あの特集はどうやって決めているのですか。

僕が直接かかわっているのは、木曜日の「そもそも総研」というコーナーですが、例えばテーマとか取材先を決め、もちろん取材には僕は必ず行きますし、撮って持ち帰ったVTRをどう構成するか、スタジオでどういうことをしゃべるかというのは全部、主体でやっています。まさにチームと一緒に僕が主導して作るという作り方ですね。

—昨今は、政治ネタが少なくなってきたような気がしていますか。

ここはテレビの宿命で、やはり見てもらえないと成立しない。イコール視聴率ということですが。いま政治は非常に温度が低くなっていると思う。だから僕も何かがあればやりたいとは思っていますが、タイミング的に今そんなにやれる状況ではないかなというのが正直なところですね。

—コメンテーターの方と別に、問題ごとに専門家を呼んでいますか、あの人選は誰が決めているんですか。

それは基本的にはプロデューサー陣が決める。最終決定はチーフプロデューサーがしますが、翌日の打ち合わせを前日に必ずして、かなり自由に意見を交わし、そこで僕も遠慮なく意見を言いますね。

—番組の中で、よく小学校のときの学級参観の話がされますね。

小学校1年生のときに、母親が授業参観で学校へ行ったら、教室の中を僕がずっと歩き回って、あっちこっちへ行って話したりしていた。それで母親が、担任の先生にいつもあんなんでしょうかと言ったら、担任の先生が、いや、今日はいい方ですよ、教室にいらって。あまり教室にいなかったみたいです。

—その後大学に入られて、大学で熱中していたことは？

僕は小さいころから熱中するものが何もなく、将来何になりたいかと大人に聞かれるのがすごく苦手で、なりたいものが何もなかったんです。ただ、テレビが好きだったんですよ。

—どんなものを見ていました？

何でも見ました。当時テレビばかり見ていて、テレビを見ても何の役にも立たないと言われていたのが、いま役に立っているんですね。

—平成元年にテレビ朝日に入社されて、大体モーニングショーを手掛けてきたのですか。

モーニングショーの時間帯が一番多いですね。

—評論家の佐藤優さんが、娯楽番組とニュース番組とが完全に分かれているようなイギリスやロシアと違って、娯楽番組の中であんなに難しいテーマを扱うのは日本のワイドショーだけだという話をされていました。それは階層社会の残滓のあるイギリスなどと違って、日本の社会が大衆社会だということの表れだと思いますが、玉川さんの中で、ワイドショーの在り方についてイメージが固まったのはいつごろですか。

まだこれからも変化していくものだとは思っています。僕は平成元年にこの会社に入り、入社2週間後か

*2：ワイドショーはモーニングショーを含む。現在は通常「情報番組」と称される。

らモーニングショーだったんです。何でモーニングショーに配属になったかという、2週間の社員研修に、当時の編成局長が講話をする時間があったんですね。多くの部署を束ねる編成局長というのはある種天皇みたいな存在だったのですが、その人の前に新入社員が一行に並べられて、君は何をやりたいかと聞かれていたんですよ。僕は、まずドキュメンタリーをやりたい。当時、『ネイチャリング』という自然派のドキュメンタリーがあったんです。それからドラマもやってみたい。バラエティーも興味がある。だけどワイドショーだけはやりたくないと言ったんです。ところが、その当時の編成局長はうちのワイドショーの中興の祖だったんですね。僕から2人ぐらい過ぎたところで、僕のところに戻ってきて、何だ、お前はと。ワイドショーをやりたくないというのはどういう見なんだと説教され、そうしたらワイドショーに配属になったんです。だから、配属されたときの先輩たちに、お前は懲役5年と言われました。

——5年は不動ということですか。

当時のワイドショーというのは、芸能スキャンダルと、それから事件。僕は嫌だったんですね。誇りが持てなかったんです。特に、当時のワイドショーの取材方法には批判がありました。今でも覚えています。僕は松田優作さんの大ファンで、平成元年入社その秋に松田優作さんが亡くなった。僕はまだディレクターになったばかりだったんですが、取材に行かされて、各局が火葬場に詰めかける中、うちのクルーも火葬場へ行っただけです。各社が火葬場の敷地内まで入って行き、待っている家族など全部撮影したんです。僕はそういうのは嫌だった。だから敷地の中までは行かなかったんです。会社へ帰ってから、先輩に、お前は特オチだと。お前はやるべき仕事をやらなかったと怒られました。僕はカチンときて、そういう取材ばかりしているからワイドショーは下品と言われるんだと言ったら大げんかになりました。だけど今の情報番組は火葬場へ行かないです。視聴者が批判するだけで、誰も受け入れないですよ。ワイドショーはそうやって変わったんです。

僕がもう一つ思っていたのは、ネタとして狭かったことです。さっき言ったように芸能と事件だけで、政

治とか経済とか一切やらなかった。だけど、例えば30代になった僕の一番の興味といたら、芸能でも事件でもなく、社会がどう動いていくかという方なわけです。それで、例えば高級官僚が青山の一等地に、格安で公務員宿舎に住めているのはおかしい等々を、自分のコーナーを持つようになってやり始めたんですね。そうしたら、そのころからやはり視聴者も変わったし、僕ら作る方も変わり、政治とか社会問題もどんどん取り入れるようになってきたんですね。これからは視聴者のニーズが変わり、僕ら作っている側の興味も変われば、情報番組も変わっていくと思います。

——30分物ですとNHKの7時のニュースのように事件オンリーですが長くなればなるほどストーリー性が入ってくるから、訴えやすくなる点がありますね。

2時間というのは、ちょうどいいかなと思っています。1時間だと少し短いかな。

——『報道ステーション』は、約1時間ですよ。

でも『報道ステーション』も、ディレクターはもっと長くやりたいと思っているんじゃないかな。VTRも『報道ステーション』は10分以内だと思います。僕も以前、そのVTRを作っていましたけれども、10分以内のVTRというのは、言いたいことを言い切れない。枠としてはやはり20分以上ないと伝えたいものが作れないかなという感じはします。そうすると、2時間番組の正味1時間40分の中で20分のコーナーを2つ入れると、もうそれで40分です。コメンテーターの長嶋一茂さんも集中力はあまり続かないかたらしいですが、2時間だったら何とか続くとおっしゃっていたし。

——放送には、企画をして、取材をして、表現するという過程がありますが玉川さんとしてはどこの段階が好きですか。

全部です。それは3つやらないとつまらない。最初は企画、取材だけだったんです。でもそれだと、本当はこういうことを伝えなかったのに伝わっていないという思いがあり、インタビューも、こういうことを聞いてほしいのにと、この話の次にはこれを聞いたらもっと本質的な話になるのと思うことがある。それはもう自分でやりたい。そこから自分で伝えたいという思い

が出てきた。だから、全部やってコンプリートだとすれば、いま僕はすごくありがたいポジションですね。

— 現在、マスメディアの危機とよく言われますが。

ネットの話で言うと、例えばもうテレビとか新聞はいらないと。ネットさえあればいいと言っている人が結構いると思うんですよ。でも、その人たちが見ているネットのニュースを集めているのは新聞であり、テレビなんです。だから、それがもしかすると認識できていないのかもしれないですね。この一次情報を集めるというのがやはり取材の根幹ですが、集めただけじゃなくて、それを選択して、料理をして出すわけですね。この過程がなくなったら、カオスだと思います。だから、情報が意味を持つのは、情報に意味を持たせるよう加工されたもの、それに意味があると思うんですね。そう考えると、ネットだけではやはり健全なメディア環境にはならないと僕は思っています。

— 新聞、テレビ、インターネットにしる、結局はコンテンツが勝負なわけですから、土台が第一次コンテンツである新聞記事によっているということは事実だと思うし、それは今後もなくならないと思いますが、それがどういうふうに変容していくかということですかね。

大前提として、ある種の倫理観を持ってニュースを集めてきて、それを編集して記事なりニュースなり、もしくは映像の番組なりにして出す記者とかディレクターたちがいないと、ネットは成り立たないし。記者とかディレクターなどの人たちが、もしかしたらテレビや新聞は廃れるかもしれないが、そういう人材がいずれネットという伝送手段の中に入っていただけだろうと思います。

— ネットを見るといろいろな意見が載っていますが、炎上するというのはどういうことなんですか。

炎上というのは、例えば僕が何かを番組でしゃべると、あいつは何を言っているんだと言って、批判の「Twitter」がわっと増えてしまうという状況ですね。

— そうすると、炎上しちゃいけないのですかね。

だから、その炎上自体は僕は気にしていない。インターネットメディアがない時だったら、テレビを見て、

何だ、この野郎とかっておじさんがテレビに向かってしゃべっているというだけの話だと思うんですね。

— 玉川さんは将来どういう方向に進みたいんですか。

少なくとも、僕は会社員であることが特徴だと思います。社員なのにこういうことを言っているというキャラクターは面白いなと思っています。もう一つは、会社員であるから守られている部分は確実にあるんです。僕は政権に対してもかなり自由に物を言っていますが、これも社員じゃなければもしかしたらもう外されているかもしれないですね。社員だから続けることができている部分って実はあるんじゃないかと思っています。だから、その二つの意味で会社員は続けたいなと思っています。

— 連日出演されているので健康に気を使っていると思いますが、我々弁護士も不健康な生活が多いので、実践できることがあったら教えてください。

野菜スープはいいですよ。週末に作って毎日食べているんです。長期的には絶対いいと思いますね。

— 最後に、弁護士についてのイメージ、注文をお願いします。

弁護士さんはいろいろな役割があると思う。一つは本当に正義の実現のために仕事をされること、また刑事弁護もそうだけれども、依頼者の利益のために法的な助けをするための弁護士さんという役割もある。でも、金だけもうかればいいと考えているような悪徳弁護士って中にはいるんですよ。だから、弁護士さんも一様じゃないなというイメージです。注文としては、法律のプロなので、社会的な弱者とか、例えば政治が暴走したとき、それを止めたいと思った市民がいるときには積極的に助けてあげてほしい。要するに自分の私利私欲を満たすために法律を使うのではなくて、弱っている人や困った人を法的に助ける存在の弁護士さんがいっぱいいてほしいなと思います。

プロフィール たまかわ・とおる

1963年宮城県生まれ。京都大学大学院農学研究科修士課程修了。1989年テレビ朝日入社。「内田忠男モーニングショー」「サンデープロジェクト」「ジャングル」「ザ・スクープ」などのディレクターを経て、2015年9月より「羽鳥慎一モーニングショー」でレギュラーコメンテーターを務める。同番組の企画「そもそも総研」を担当。